
U S O よね・・・

Seabolt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

USOよね・・・

【Zマーク】

Z2818Z

【作者名】

Seabolt

【あらすじ】

突然、お見合いをしろといわれたのぞみ・・・そのお見合いで既
に結婚が前提・・・しかも、相手は・・・

「は」

溜息をしかでなかつた。なぜ私が？・・しかも・・・この年で・・・まだ高校生なのに・・・・・・・・・出していた。

そう自問自答する彼女の名は岡田のぞみ、彼女にとつて今回のことは寝耳に水、天国から地獄とはこのことだつた。ただベットの上でただ呆然とし、何度もため息をついては、ついせつときのことと思い出していた。

「えへへー！お見合はーー？・・・」

家に帰つたのぞみは思わず大声を上げてしまった。のぞみにどうして・・・この日、天国と地獄がいつぺんにやつて来た。それは2学期が始まつてすぐのことだつた。

まず最初にやつてきたのは天国だつた。実はこの日のぞみは中学から^{しまだゆつじ}の同級生の島田雄一から学校のチャペルの裏に呼びだされた。そこへ行くと、まだ日に焼けて顔は黒く頭はようやくスポーツ刈くらいまで伸びたすつとした顔立ちをした島田雄一が待つていた。彼は甲子園へは行けなかつたが、野球部のエースで四番、しかも頭もいいと学内でも結構人気のあつた。

「島田君、どうしたの？」なんとか口を開んで。

そう話しているのぞみ自身、呼び出された時点で、告白されると言う期待で胸が一杯だつた。そして、島田はのぞみの予想通りの話をしてきた。

「岡田！……おれ……ずっとお前のことが好きだつた。そして、今も・・・」

田の前で起つてゐる夢にまで見ていた光景につづりとしているのぞみだつた。のぞみとしても島田の事が嫌いなわけではなく、答えはむしろYESと即答したいところだつたがここはぐつと我慢した、しかし、島田の最後の一言でのぞみは肩透かしを食らつた感じになつた。それは、のぞみが近づいて手をとるひつとした時だつた。

「明日、お前の気持ちを教えてくれ！――

「えつ？」

「明日、いいでな――」

のぞみが驚いてくる間に島田は、わざとのぞみから離れ去つて行つた。なんなのよ――と思いつつも気分は最高の状態だつた。

そんな気分で帰宅したのぞみに悲劇は襲い掛かつた。それは、家に帰つたのぞみを父が呼び止めたことから始まつた。今思えば、大体、ごく普通のサワーマンである父は、こんな時間に家にいる」と眞体珍しいと言つつかおかしい」とであつた。

「のぞみ・・・ちょっとこいか？」

珍しいなあ～のぞみはそう思いながら、リビングに入ると両親が目の前に正座して座っていた。しかも真剣な顔をして・・これってどうこうこと?ひょっとして、私に就職しろといふこと?これでもれつきとした受験生ののぞみ・・しかも・・私立だけど進学校である城山高校の・・それともリストラにあって学費がきつくなつたの?そう思つているとお父さんが話しかけてきた。

「まあ・・・座りなさい・・・」

言われた通りに両親の前に、しかも正座で座ると・・・一人の雰囲気が・・・やはりおかしい・・・こ・・・これは、やはり、リストラされたのお父さん? そう思つていたのぞみの予想だにしなかつた言葉が父の口から飛び出してきた。

「 のぞみ、来週の日曜日にお見合いが決まった。」

「えつ～！お見合い!？・・・どうこうこと?？」

私は思わず大声を上げてしまった。

「だから、来週の日曜日にお見合いが決まった。」

すまなそうな顔で話している父とは対照的に横で母はにこやかな顔をして頷いていた。父の言動に困惑するのぞみ
・今・・・なんて、と父を見ると顔はマジだ・・・ビ・ビビビうい
うこと?そ・・そうよ・・これはきっと[冗談よ・・・そつ・・・絶対
そつよ・・・

「ジョー！…・・・・冗談でしょ？お父さんたら～ねえ～またまた・・・
そうでしょ？」

父の表情が少しあわらぎ、こつものむかぢられた雰囲気を出しても
た・・・やつぱつやうじょへ。おとづれと・・・

—そう・・冗談・・・

少し泣いたり止むのをした時を母が制した。

「あなた！！」

えつ？お母さんまで・・・どうこう」とよ。再び父の表情が険しくなった。そして、母の表情も厳しくなってきた。・・・お父さん、お母さんまで、お互いの顔を見合せて頷いたりやつて、しかも・・・真顔でのぞみのまゝを向いた。

「本当だ・・・」

嘘―――のぞみは一瞬にして思考は完全停止してしまった。何言つてゐるのよ～おとうさん・・・うそでしょ？しかし、本當だとこの言葉が何度も繰り返し頭の中を駆け巡る・・・どうこうこと？のぞみはしづらへ呆然とした。

「う・・そ・・よ・・ね」

「うれじやないわよ。」

母の言葉は容赦なくめぐみに止めを刺した。

「うれじよ・・わたし・・受験生よ」

「のぞみ～頼むから・・・」

そう言つた父の方をみると土下座してゐるを見て驚いた。・・ちよつと何してんのよ・・・やつ黙つていると母まで土下座をはじめた

「やめてよ～おとうさん・・お母さん・・・」

めぐみの言葉にも土下座をやめな這一入、

そもそも原因は、のぞみの父にあつた。彼の学生時代 父が通つていた大学の親友である藤堂とうじょうとある飲み会の席で将来自分達の子供を結婚させると約束をしてしまったことからだつた。あれから数年が経ち、いい加減な父はそのことを完全に忘れていた。しかし、

ある日のこと、仕事上で藤堂と会つことになった。そして、藤堂の開口一番は「あの約束、覚えていいだろ?」だった。父は、最初は、酒の席でと話をかわそうとしたが、藤堂は本気だった。やむなく話を進めることに……と私の不幸の元凶を話した父の言葉にのぞみは瞼み付いた。

「ちょっと待つて……」の話ついで……すでに結婚が前提なの?」

あわわと再び土下座をする父は、何度も頭を上げ下げしながら

「すまない。のぞみ、本当にすまない。お父さんを許してくれ……！」

「いやよーーー、なぜーーーいきなり結婚なのー?」

「本当にすまない。」

とつとつ父は土下座をしたまま、頭を床に当たし、私のほうへ顔をあげることすらしなくなつた。ん?と母を見るとこやかな顔をしてのぞみを見てくる。

「こいじやなーーーのぞみーー行き先決まつて。」

「ちょっとお母さん……なーーなんてい」と……

「彼氏いるの?」

「な・・・・母さん……。」

「いないのわよね。そんな男勝りじゃ……。」

「ちよ・・・ちよつと・・・

「一度よかつたじやない・・・」

母の容赦ない言葉はのぞみの心をジャックナイフでズタボロにした。するとその横で土下座し続ける父の侘しい声が響いてきた。

「のぞみ・・・たのむ・・・」

父の方を見ると土下座して髪の毛の薄くなつた頭を床に擦り付けている姿が哀れでしうがなくなつてきた。おとうさんも乗り気じゃないのに・・・ここまでするなんて・・・のぞみは、ため息交じりに返事をした。

「わかつたわ・・・

そして、ガクツと肩をおとし、うつむき床の縫合田を私はじつと見ていた。

そんなり・・・酒の席のことを見

はあ・・・なんて不幸な少女なの私は・・・やう思つてゐると父がおもむろに顔をあげた。

「のぞみ・・・これ・・・」

のぞみは父を見るとすまなそうな顔をし差し出した田の前のファイルを見た。そのファイルはかすかに揺れているのがのぞみにもわかった。そして、何度もファイルと父の顔を交互に見た。

「これは？」

その言葉にびくつとする父

しばり黙つてゐる……

「これは？」

もつ一度聞くと父は目を閉じふつとため息を付いて頷き、そして覚悟を決めたかのようにこう語つた。

しかしその声は徐々に声が小さくなる父親・・・そして、お見合い写真を震える手でのぞみに手渡した。

「見合い相手の写真だ・・・相手の名前は、藤堂光・・・」

藤堂光その名前はのぞみにとつて、聞き覚えのある名前だった。そう彼は彼女が通う高校では知らないものはいない有名人だった。・・・しかし、その写真を見て愕然とした・・・おかげで頭のデブ・・・センスのないまるく赤いふちをしたメガネをして・・それには、この意味のない無精ひげ・・・一瞬期待していたのぞみにとつては、悪夢そのものだった。のぞみが呆れて目をそらし父の方を向くとつむいて皿をあわそとせず小さな声でぼそつと

「28歳」

のぞみは皿を見張つて、もう一度の写真を見た。2・・・28歳つて私より10歳も年上つてどう見てもこの人28に見えない・・・しばらく、その写真をじつと見ていたというか固まつていたのぞみ・・・やがて・・手が震えだした。

「のぞみ？」

かすかに聞こえる母の声、ビービィーと振るえが止まらない……

「うわ・・・よ・・・ね?」

私はお見合い写真がぽとりと落とした。父は、その音に気付き顔を上げた。それに気付き私が父の方を見るといったと頭を上げ下座の状態に戻った。

「すまん・・・」

・・・・・・

・・・・・・

・・・・・・

かなりの沈黙の後、

「あへ――――」

のぞみの心から叫び声に驚き両親を思わず抱き合つていた。

ビービィー・・・

本当に娘の幸せを考えてるの？

はあー・・・・とため息をついて席を立つた。

「どこの行くの」

母の一言に思わず両親を睨むと両親は抱き合つたままびくつとなつていた。

「寝る」

部屋に戻ったのぞみは、お見合い写真をゴミ箱のほうへ投げた。しかし、その軌道は大きく外れ、壁に直撃、偶然に壁にもたれ掛け写真がのぞみのほうに向けパカリと開いた。その写真を見て思わずそれを閉じた。のぞみはベットに倒れこんだ。なにが藤堂光よ！？そう思つているとふと同じ高校に通う藤堂の顔が浮かんだ。

藤堂光、藤堂グループの御曹司、学校中の女子が憧れるバリバリのイケメン男子で御曹司とあって毎朝高級車で登校。そんな彼にのぞみも憧れていた一人だった・・・でも、身分が違い過ぎる。そして、彼には、立派なご令嬢の彼女、音羽えり（おとわえり）がいる。しかもその彼女とは幼馴染ときていて、どこにも入る隙もないし、うわさでは、ちょっとかいを出したら、音羽さんに相当いじめられるって聞いていた。だからのぞみにとつては雲の上の存在の彼だけた いくら同じ名前でも・・・と思い再びのお見合いの写真を見たそして、思わずその写真をゴミ箱へ投げ捨てた。

ベッドの上で膝を抱えるのぞみ。横を見ると鏡に映る自分の姿が

目に入ってきた。ショートカットのヘアにいくつも平凡な顔立ち空手をしているせいか、どちらかと言えば男の子っぽいしなんて不幸なんだろう・・・やつぱりあるおかっぱテープとは、違いすぎる・・・いかんなんとかしないと・・・うん・・・何か忘れているような・・・・・・・そうだ・・・今日告白されたんだつてつけ・・・・今度は島田雄一の顔が浮かんだ・・明日返事しないと・・ん?・・・この見合い壊すの手伝ってくれるかな?・あ〜どうしよう・・・眠れない・・・

こうして、のぞみの眠れない夜をすごした。

藤堂は、さつき父親から渡されたもう一度お見合いの写真をみた。そして、思わず「ミニ箱に投げ捨てベットに倒れこんだ。親父の奴全く一体何を考えてるんだ？・・・これが藤堂が最初に思ったことだった・・

実は同じじとが藤堂家でも起きていた。

それはちゅうと前のことだった。呼び出されリビングに出てきた藤堂は父の言葉に我が耳を疑つた。

「来週の日曜日に婚約者と会つ」とになつた。

「ちゅうと待て！…婚約者つて…どうこう」だ…！

ダーン！…と机を思いつきり叩くと同時に藤堂は叫んだ。

「親友との約束でな、まあ・・・いきなり結婚という訳にいかんから、といあえずお見合い形式で顔をあわせる」とにな

「約束つて、俺何も聞いてないぞ…！」

「やかまし…！」

父親はそう怒鳴り、机を叩いた。そして、フンと鼻息を荒くして、

「光！…もう決まったことだ…それとも、わしの顔を潰す気か！

！」

立ちはぐくじぐつと拳に力が入る藤堂、親父の奴！！だいだいこうな
ると親父は誰の言つことも聞かなくなるといつひとを息子である藤
堂自身が一番知つていた。

「ナビ・・・

藤堂の言葉を無視する親父は腕組みをして藤堂を睨んだ

「学校でも良じ尊きかんのだが」

「なんのこじだ。」

「「」の前の件だ・・・」

「あれは・・・」

それは、夏休みの前のある日のこと、藤堂に自転車でぶつかってきた奴がいた。そいつの両親は、藤堂の父の知り合いだった。両親は学校を辞めさせないでくれと父にまでお願いしに来ていた。しかし、藤堂のせいでその彼は一〇日もしないうちに学校を去ることになった。実のところ藤堂はその彼を許し、取り巻き達には手を出すなどまで言つていていたのだった。しかし、藤堂に逆らつたら学校を辞めさせられる・・・そういう噂が先行していった。そして結局その彼は何もおきないまま尊に負けて学校を去った。そのことをつらんでいるのか親父は？そう思つ藤堂に父親は追い討ちを掛けた。

「そろそろ落ち着いたらどうだ。」

「それとこれとは全く話が違うだろ？！－！」

そんな姿を見ていた親父は、”ほれ”と言わんばかりにお見合いで写真を藤堂の前に出した。

「？」

田の前に置かれた見合いで写真を見て、いやな予感がした藤堂……手にした見合いで写真を開こうとした時、父がこういった。

「相手だ。岡田のやみさん28歳」

その言葉にちょっと待て今なんていつた？ 確か28歳って言つたよな？ そう思つて父親を睨んだ。

「何睨んでんだ！！お前は年上が好きだつたら？」

ぐっと堪える藤堂、幼いときに母を早くなくした彼の初恋の人は身の回りの世話をしてくれた家政婦だつた。しかし、そんなことは藤堂にとって既に過去のことだつた。何をいまさら写真を開いて見た。その瞬間、田はこれでもかと言わんばかりに開き顔は硬直した。そして、わが田を疑つた。

「…………（声が出ない）」

な・・なんだ？ この写真？ 親父本気か？ どう見ても40過ぎのおばちゃんじゃねえか？ しかも、下手なというか？ なんていう化粧の仕方だ？ そう思つたらただ震えて・・父親を睨んだ。

「なんだその田は・・」

そこには、どう見ても少し太めのおばさんの姿が映っていた。

—
•
•
•
•
•

「何か文句でもあるのか？」

—
•
•
•
•
•

藤堂は無言で、部屋を後にした。

「今度の田曜田は絶対にあわせるからな……。」

ベットに横になつてゐる藤堂は、岡田のぞみ・・か・・そう思いながら・・・悩んでいた。ふと、幼馴染の音羽エリの顔がよぎつた。学校では彼女として周りに公認されてゐるが実のところがどうも合はないと藤堂自身は思つていた。あの性格からしてエリには頼めない・・・といふか親父の奴すでに手を回してゐかもしれない・・・ふと、音羽の姉、音羽静の顔が浮かんだ。しづ姉えには迷惑はかけらない・・・どうしたらいいんだ?

「うつして藤堂も眠れぬ夜をすごした。

「のぞみは最悪の田覚めを迎えた。それは、ほとんど眠ることが出来ず、うつらうつらと眠りそうになつた瞬間にけたましく鳴り響く田覚ましに叩き起こされたことによる究極の睡魔と体のだるさの非ではないくらいにつらいものとなつた。何とか起き上がりたのぞみだが未だに解決の糸口は見えず頭の中は混乱したままだつた。ただ今日、島田に会つこと、それがのぞみの唯一の希望の光であつた。しかし、彼女の悲劇はこれだけでなかつた。この後、電車に乗り遅れ、しかも次の電車は満員電車。とにかくついていかつた。

ようやく校門までたどり着いたのぞみは睡魔に襲われ朦朧とする意識の中、道路の真ん中を歩いていた。その頃一台の高級車が校門を通過して彼女の後ろに迫つていた。そして、その車はのぞみの後ろまで迫りクラクションを鳴らし始めた。しかし、のぼみはそのことに気付かず漫然と走っていた。普通なら誰かがのぞみに声をかけるのだがその車を見て誰も動けなかつた。そつその車の主は藤堂だつた。

一方、車でうつらうつら藤堂はそのクラクションで田を覚ました。

「どうした?」

運転手がクラクションを鳴らすが田の前にはふらふらと歩くのぞみの姿がそこにあつた。しかも、何度クラクションを鳴らしても、全く反応がない。いい加減に運転手も苛立ちクラクションの回数が増えてきた。

「なんなんだ、あの子は？ワガとか？」

田の前をふらふら歩く少女を見た藤堂
「どうこうつもりだ？」 そう思いつつも田の前の様子を見ると、
クラクションに向に気付く気配もなくただ歩いている。これでは
埒が明かないやつ思つた藤堂は運転手の肩を叩いた。

「いい、ここで降りる。」

「えつ？でも」

「いいから止めや」

車から降りた藤堂はのぞみに向かつて歩いて行き腕をとつた。

「おこ」

腕を取られたのぞみはえつ？一体何なの？ただでさえ回らない頭に
突如体をゆすられ、ある種のパニック状態になつていった。もう・・・。
なんなのよ・・・やつ思つてこるとじろく再び藤堂が声をかけた。

「おこーーー！」

「なんなのよーーー！ 一体ーーー！」

のぞみが振り返り顔を上げるとそこには藤堂の顔があつた。しまつ
た！何故？藤堂さんがここにいるの？のぞみはそのまま固まつてしまつた。一方、藤堂は振り向いたのぞみが目の前に飛び込んできて、
しかもその真っ赤でかすかに涙を浮かべいる田が自分をしたから見
つめる姿に言葉を失つた。

「あつ・・・」

しばらく見つめつゝ一人・・・その様子を見ていたギャラリーからヒソヒソと声がしてきた。

その声に気付いた藤堂は車の方を指差した。

「よく見ろ。」

のぞみが指差された方を見ると、そこには一台の車があった。運転席からはハンドルを抱えてのぞみを睨んでいる運転手の姿が確認できた。
やばーやつちやつた　震える指で車をさしたのぞみ
は、視線を藤堂の方に向けた

「ひょっとして・・・」

「せう・・・」

少し険しい顔をした藤堂が「クリとつなぎいた。

「私が邪魔を・・・」

「せう・・・校門から・・・」

藤堂は、道端までのぞみの手を引いて歩いた。

「いわんなさい。本当にワザとじゃないんです。」

まづこ・・・怒鳴りつけられたる・・ビツコウつ

そつ思このぞみ

みはひたすら藤堂に頭を下げ謝った。それはこの間の事件の時は、藤堂もマジになつて怒鳴り散らしていたからだつた。しかし、このときは何かが違つた。車が通れるところを間でのぞみをつれてきた藤堂は掴んでいた手を離した。

「もういいから行け！」

「「あんなさい。」

何回も頭を下げ謝るのでみ

「わかつたから、行け。」

「あつがとうござります。」

助かつた・・・やう思いのぞみはそそくせと逃げて行つた。

のぞみの後姿を見送る藤堂は、しばらくして、さつきまで握つていた手をみた。
なぜ？俺は怒らなかつたんだ？そして、人波の中に消えていくのぞみの姿を田で追つた。そんな時だつた。ふと小さい頃を思い出した。

堂の額にキスをする少女も姿・・・あの時は、その少女の妹を怒るのを我慢したときだつた。気が付くと自分の額に手を当てていた。
いかん・・・俺は何を・・・やはり昨日のことで眠れなかつたせいか？・・・藤堂は頭を振つた。そして、運転手に

「いいから歩くから・・・」

そういう残し、教室に向かつた。

さくあく・・・2

あー！さいあくぐー！！！朝からなんてついてないのぞみは頭を抱え自分の席にいた。やつてしまつた・・・・・手を引かれ一瞬で目の前に現れた藤堂の顔が浮かんできた。こういう時に限つてのぞみの頭には悪いことしか思いつかなかつた。ひょつとして・・・学校を追い出されるかも・・・ということはすぐ結婚？いやだー！

！・・その瞬間、さつきまで浮かんでいた藤堂の顔が思い出したくもない顔に変化した、そうおかっぱ頭をした意味のない無精ひげを生やしたデブのおつさんの顔が・・・・思わず頭を左右に振り、そして、そのまま机に伏せた。そんな時のぞみの後ろからそつと近づく二人の姿があつた。親友の岩崎裕子と大山美由紀だつた。

「のぞみへ見たわよ」

ପ୍ରକାଶକ ମନ୍ତ୍ରୀ

のぞみは、ふと顔を上げ・・・・はあーとため息をつきつむいた。
その肩に手を掛けた岩崎

「どうしたの？元気ないね。」

いや。別に。

目の前に立つ一人を見たのぞみ・・・再びため息を付いた。それを見ていた大山はそつと後ろに回った。

「本當？」

そう言つて、のぞみの首を絞めた。

「ぐあ～！！」

いきなり首を絞められたのぞみはのけぞつた、その状態で大山は質問をした。

「よく、あんなことできたわね～」

「は・・はなして・・」

のぞみは、大山の手を軽く叩いた。そして、ようやく首を開放した大山の前で首を押さえしばらく咳き込んだ。ふうとため息を付いて二人を見た。

「あんなことつて？」

のぞみの言葉に目が点になる一人・・・

「ちょっとー！大丈夫、のぞみー！」

今度は岩崎がのぞみの両肩を持つて前後に激しくゆすった。その搖れにあわせ首が前後するのぞみは両手で岩崎の肩を持つてゆするのを止めた。

「裕子、だからなんなのよーーー！」

「だから、今朝のことよーーー！」

「今朝つて？」

「藤堂さんの件よ、」

「あ・・あれね・・」

「あれねって、のぞみが追い出されるつて、もう学校中大騒ぎよー！」

のぞみは、二人を交互に見て、溜息をついた。このまま追い出されたら・・・ふとさつきの不気味な顔がのぞみの頭をよぎった。あー！ーと叫びながら、頭を数度横に振っているを見て、心配する一人

「のぞみ・・・大丈夫」

「とにかく、藤堂さんに謝りに行きましょうーーー！」ね

そう言つて大山がのぞみを手を引いた時、

「ほつといてよ、それどころじゃないのよ。あーーーもう終わりよーーー！」

そう言つてのぞみはその手を振りほどき、頭を抱え込んで再び机に伏せた。この不可解な行動に、おろおろする二人だったが、ある人物が目に入つて思わずのぞみから離れた。

机に伏せていたのぞみは、フト暗くなつたのに気付いた。どうしたんだろう、ひょつとして眠つてしまつたの？ そう思つて見上げるとそこには、音羽えりとその仲間が立つていた。頭が混乱しているのぞみには、何故彼女がここに来たかが理解できずに・・・音羽とその愉快な仲間達だ・・・ただそう思つていた。ふと見ると若崎と

大山の姿がなかつた。どこ行つたのとあたりをキヨロキヨロして、
ると教室の片隅に一人が逃げていたを見つけた。あの一人……。
そう思つていたら、田の前で腕を組んで立つてゐる音羽がのぞみを
睨み声をかけてきた。

「ちよつとーーあなた」

そう言われたのぞみは、辺りを見回して音羽の方を向いた。そして、
のぞみは自分を指差し聞き返した。

「ひょつとして?」

「あなた以外に誰がいるの?」

えつ? 何で私なの? そう驚いてるのぞみに音羽は話を続けた。

「あなたに警告しに来たの」

「警告つて?」

どうこうひとのぞみは不思議そうに首をかしげた。その行動を見て音羽は眉間にしわを寄せのぞみを睨んだ。

「そつ・・あなた・・・直観なさそつね

「なにを?」

「本當」・・・じいばつくれてーーー」

「えつ?」

「藤堂さんの車が通るのを邪魔したでしょ」「……」

音羽の声のトーンが徐々に上がってきた。のぞみは音羽の声に押され座つたまま少しのけぞつた。その時、のぞみを再び睡魔が襲つてきた。そして、音羽の前で大あくびをした

「ただ、眠たかっただけなの。うあああ」

その顔を見てあきれた音羽は、一度横を向いて息をふつと吐いた・・・

「まあ～今日は見逃したげるわ・・ふん」

そつ言い残して音羽たちは教室を去つて行つた。

しばらくして、近寄つてきた岩崎と大山・・・

「なに・・・あれ・・・」

「なに・・・って、あんた達、」

のぞみ急にキヨロリ、キヨロリと一人を見て

「えつ・・・・じつしたの？急に元気出して・・・」

「あなたたち・・・私を見捨てて逃げたでしょ」「お仕置きよ

頬杖を突いて席に座っている藤堂は、さっき手を引っ張った時、振り返ってきた彼女の顔が思い浮かんだ。そんな時、俺どうしたんだ？何故あいつの顔が気になるんだ？そう思つていると横から聞きた声が耳に飛び込んできた。

「よつ。藤堂」

そう言つてポンと肩を叩いた小宮真、そして、井上豊は笑いながら鼻しきてきた。

「どうしたんだ。藤堂。今朝のあれ。」

藤堂は頬杖を着いたまま一人から田をそらしたため息混じりに声を漏らした。

「あ～あれか・・・」

元気ののない藤道に一人は顔を見合せた。そして、井上が藤堂に肩を組んで

「いつもならもつと怒つてたろ？」「

「やうか？」

力なく答える藤堂・・・

「そういえば・・・元気ないな・・・どうした？」

小富が藤堂の顔を見て、聞いてきた。

「いや・・なんでもない。」

味気ない返事に井上と小富は顔を見合させ、首をかしげた。そこへ音羽が教室に入ってきた。

「光^{ひかる}」

「おっ・・彼女のお出ましだ・・・」

藤堂は、ちらりと音羽に目をやり、ふうっとため息を付いた。

「どうしたの。？」

音羽は、不思議そうに見て、藤堂の前に座る。

「なんでもない・・・・」

そういうと藤堂は音羽から目をそらした。

小富と井上の方を見た音羽は、藤堂を指差し

「？」

一人は、両手を挙げ、わからないそぶりを見せた。

「まつ・・いつか・・今朝の見たわよ」

「何を？」

「あれか？」

まともに返事をしない藤堂元

「どうしたの。 本当」

「なんでもない。」

「もう？・・・といひで、今週の日曜日あこへる。」

音羽が聞くと藤堂は、わざにため息をついて

「その日は、用事がある。」

「あつもう？・・・じやあ今度ね・・・」

そつまつて音羽は立ち上がり小廊と井上元

「どうしたの」

「朝からあのまま・・・俺達にもわからん。」

「もう」

音羽は教室を後にして

昼休み、藤堂は、礼拝堂の裏にあるベンチに腰掛けっていた。この場所は藤堂のお気に入りの場所で一人でいることが多かつた。藤堂は悩んでいた・・・親父の奴・・・一体何を考えてるんだ?なぜ、今なんだ?そこへのぞみが一人で歩いて来るのが目に入った。あの女、今朝の・・・と気付いた藤堂はその様子を見ていた。

のぞみは昼休みに入つてすぐに、昨日島田と会つた場所へ向かつた。昼休みよね。確か そう思いしばらく携帯の時計を見ながら待つていた。 遅い・・・ひょっとして昨日のはうそなの?それとも今朝のことであつたと田の前に島田の姿を確認した。

「岡田さん・・・

島田が声をかけて近づいてくる様子を見て少しもじもじするのぞみ來てくれたってことは、 のぞみの前に来た島田を見て少しうつむいた。

「あの・・・

のぞみが決心して、話そとした時だつた。島田の様子がおかしいのに気付いた。それは目を大きく見開いて、のぞみの後ろを見ていた。

あれ~どうしたんだう~

「岡田さん……」

「はこ・・・」

そう答えたのぞみの肩に誰かの腕がずしりと乗っかった。その衝撃に驚いて振り向くとそこには藤堂が立っていた。

「と・・・藤堂さん?」

その声にチラシとのぞみを見た藤堂は視線をすぐに島田の方へ向けた。何故藤堂さんがここにいるの?のぞみがそう思っていると藤堂が島田に話しかけた。

「島田・・・」の娘と話があるんだけど、せすじてくれないか?」

「え? けど・・・」

しそひじく固まる島田・・・島田痴逃げないと祈るのぞみを無視して、島田に睨む藤堂

「休み終るんだけど・・・」

「岡田・・・悪いわ。」

ややくわと逃げよひとする島田
「あ・・・ひみつ」と

のぞみが止めよひとするが島田は逃げて行つた。

「じやあ・・・」

「島田君・・・」

のぞみが言つた言葉にはむなしさしか帰つてこなかつた。あ・・・のぞみの心の叫びは届かぬまま、島田の姿は校舎の影に消えていつた。どうしうつ・・・そつ思つて振り向くとかひこま、少しにやけた表情の藤堂が立つていた。

「何で」とあるの?..

のぞみは思わず言つてしまつた。その言葉を聞いてしばらぐのぞみの顔を見た藤堂、「いつだつたら・・・こけるかもそつ思つて。のぞみの顔を指差した。

「今朝の事といい・・・いい度胸してゐなあ~」

「えつ・・・」

「咲前は?..

「えつ?..」

「だから・・・咲前は?..」

「岡田のぞみ・・・」

仕方なしに答へるのぞみ・・・岡田のぞみと聞いて、藤堂は、お見合ご同真を思い出した。そして、のぞみをもう一度よく見ようとした。ついでいた。

近づいてくる藤堂・・・な・・・何故?近づいてくるの?やつ思い
つつ少しづつ後ろにやがるのぞみ・・・

「な・・・なんのみーーー」

「ふ～ん・・・岡田のぞみ・・・か」

さう近づいてくる藤堂・・・やがて、のぞみの背中が壁に碰到した。えつ?ひ・・下がれない・・・どうしようつ・・・のぞみがそう思っていると藤堂の右手が伸びてきた。思わず手をつぶるのぞみ・・・その手は、のぞみの顔をかすめバンと壁についた、

そして

「気に入った。・・・」

「えつ?」

その言葉に驚き田を開けると藤堂の顔が田の前にあった。なんのよーーー今朝の仕返し?やつ思っているのぞみに藤堂はやさしく語りかけた。

「じょひへ、俺の彼女にならないか

い・・今・・・なんて言ったの
・・・のぞみの思考は3秒ほど止まった。ふと藤堂を見るといち
ちかい・・・それもそのはず、彼の顔が目の間じかにあつたからだ
つた。そして、藤堂からの驚きの一言に思わず聞き返した。

「いま・・なんて?」

小首をかしげているのぞみに対し藤堂は、冷静に答えた。

「だから、彼女にならないか?」

「誰の?」

「俺の」

「私が?」

そう聞き返すと藤堂は軽く頷いた。のぞみは混乱した、何言つてる
のこの人、音羽さんて彼女がいるくせに・・・一体何考えるのよ・・
・と言つよつ、私の・・・と島田とのことを邪魔をされたこと
を思い出した。そして、ふう~と息を吸つて

「何言つてゐるのよ。」

「彼氏もないだろ?」

藤堂はにやりと不適な笑みを浮かべた

あ～頭ごくる・・・のぞみは、藤堂を睨み返した。

「あんたには、関係ないでしょー。」

藤堂はフンフンと頷きながら、のぞみの顔を指差した。

「まあ・・・関係ないナビ・・・でも、こんなにこいつの条件はないぞ。」

「いい条件って・・・確かに条件はいいけど・・・音羽ちゃんはビリするのよ・・・のぞみは、その指を持つてそれを振りほどいた

「それに、立派な彼女がいるじやない。」

「あ～あこつか・・・あこつじやだめなんだ・・・」

「なぜ？」

「あ・・今なんて？・・藤堂さん・・あなた・・彼女がいるのにたださえ・・・ややこしいの！」

・・・しかもあの音羽さんなのに・・・彼女が今の状況知つたらどうなるのよ・・・本当に・・・

藤堂としては、いい加減に折れろよ・・・ほんと・・・・・・・面倒な奴だな・・・エリジヤダメなんだよ・・今回のことば・・・だんだんと苛々してきた。

「あこつじやあ、駄目なんだ。」

「だから。なぜ？」

「俺がいやなんだ！……」

藤堂の言葉にしばらく、固まる一人、なんのこいつ？自分の彼女が嫌なんて？のぞみは呆れた。少しきつく息を吸った。

「嫌よ！……」

「嫌とはなんだ嫌とは…」

こいつ一体……俺のどこの嫌なんだ？だんだんと声のトーンが上がる藤堂

「嫌なものは、いやよ。」

「やうか……どうしても嫌か

「ええ・・

のぞみがそう言つた次の瞬間、藤堂の左手がのぞみの顎をやつと持ち上げ、のぞみの唇に藤堂の唇が重なった。

「……」

のぞみは田を見開いて硬直した。

田の前には藤堂の顔が・・・

そして、唇には感触が・・・

と・・・藤堂さんと・・・

キ・・・キスしてゐるの?わたし?

頭の中は、真っ白だった・・・

やがて唇がそっと離れ、藤堂がのぞみをじっと見つめる

のぞみは硬直し、ただ藤堂の目を見ていた。

キ・・・キスされた・・・藤堂さんが見ている・・・

顔が熱い・・・どうしよう・・・

そう思つてみると藤堂が話しかけてきた。

「これで・・・いいか?」

その言葉でわれに返つたのぞみは、唇を両手で覆つた。

「これで・・・付き合つてくれるか?」

話が言い終わる前にのぞみの右手が藤堂に炸裂した。

パチーン！――！

「えつ？」

藤堂は、叩かれた頬を押さえのぞみを見るとその皿には涙が・・・

「嫌よ――！」

そつ言つて、のぞみは、走り去つていった。

「おい・・待て・・・」

なんなのよ・・・

もう最低・・・

のぞみはその場を去つて行つた。

長い夜・・・

のぞみの背中を見送る藤堂、彼女の姿が後者の角に隠れるまで見送っていた。そして、見えなくなると叩かれた頬がジーンとしてきた。その叩かれた頬に手を当て、呆然と立つ藤堂 ふと幼い頃に注意され叩かれた時の記憶が甦ってきた。その時も理由は覚えてないが彼女の妹を泣かせた時だった。藤堂を叩いた彼女も涙に目を浮かべ

「女の子を泣かせちゃダメでしょーー！」

そう叫んでいた。そのことを思い出した藤堂・・・しばりくして、とぼとぼと歩き溜息をついた。俺は一体何をやっているんだ？ただなんとなく胸が痛い・・・そのまま学校を後にした。

教室に戻って来て、すぐさま、鞄をもって教室を出ようとすると、みに驚いた大山と崎

「どうしたの？ のぞみ」

「帰る。」

「どうしたのよ。のぞみーー。」

「帰るのーー。」

そう言って教室を出ようとするのぞみを大山が肩を引っ張った。

「あ・・」

振り返ったのぞみの顔を見て言葉を失つた、大山と吉崎・・・のぞみの目には涙が・・・

「じゃ・・」

ただ呆然とのぞみを見送つた一人だった。

放課後、のぞみのクラスは騒然となつた。それは、また、音羽がやつてきたからだつた。藤堂が帰つてことを知つた音羽に間が悪いことに井上がボソッと適当に言つたことが原因だつた。

「藤堂さんどうしたの?」

「帰つた」

「なぜ?」

「今朝のこととで・・・なんかあつたみたい。」

その言葉を聞いた音羽、あの娘、警告を無視して・・・キッと目が鋭くなつた。そして、いつもの仲間を連れて、のぞみの部屋に向かつた。

「あの娘どこ?」

突如、現れた音羽に教室はざわついた。そして、クラスの一団が音羽の行動に引いた。

「あの娘は？」

そう言って、逃げ惑うのぞみのクラスメートの一人を捕めた。

「あの娘、どこ行つたの？」

「えつ？」

音羽は拍子抜けした。なに～！帰つたつて？どういわこと？

「本当に？」

二
はい

「お・・・い・いわ・・・」

そういう残し音羽は帰つて行つた。

それから、しばらくしてのことだった。島田がひょこつりと現れたのは、そして、大山から帰つたことを聞いて、肩を落とし帰つて行つた。

家に帰ったのぞみ、一人ベットの上で膝を抱いて泣いていた・・・。もう・・・最悪・・・なんでこんなことに?島田君を巻き込もうとしたから?今朝のことを思い出した・・・このままじゃ・・・学校も追い出され、無理矢理あいつと結婚するの?ふとあのお見合い写真が頭に浮かんだ・・・あ~あ~嫌だ!!!一人抱えた膝の上に顔をこすり付けていた。どうしよう・・・嫌だ・・・こんなの嫌だ・・・そう思った瞬間、学校での藤堂光とのことを思い出した。

「俺の彼女にならないか?」

その言葉を思い出した瞬間、藤堂のドアップ・・・そして、キスを思い出した・・・思わず唇を触ったのぞみ・・・キス・・・。したんだ私・・・あの藤堂さんと・・・しかも・・・ファーストキス・・・唇にはあのときの感触が甦ってきた・・・一瞬で顔が暑くなり、心臓の鼓動が激しく高鳴った。そんな時だった携帯が鳴り出したのは・・・はっと我に帰ったのぞみは、携帯をとり表示を見ると大山からだった。

「もしもし〜」

「のぞみ〜!!大丈夫?」

「うん。」

「どうしたのよ。」

「なんでもないってば〜」

「そう?本当に大丈夫?」

「うふ。」

そう言つてゐるのをみだつたが、目から涙が出ていた。

「ほら・・泣いてるでしょう・・」

「大丈夫だつてば・・・」

「わう・・・じゃあ・・・のぞみが帰つた後の話なんだけど・・・」

「うふ。」

「音羽さんがあたのよ・・」

「うふ」

「でも、のぞみいないから~すぐ帰つたんだけじね・・・」

「うふ・・・」

「それと・・・」

「・・・」

「聞いてる?」

「うふ・・聞いてるよ・・・」

「島田君、来たのよ。のぞみを探しに・・・」

「えつ？」

「だから……島田君が来たの……ひょっとして、のぞみ、付き合つてるの?」

「付き合つてないわよ……」

「あ……そう……じゃあ……早く元気になつてよ」

「うん……ありがとう……」

「じゃあ……」

切れた携帯を見たのぞみ……そうだ……島田君を巻き込んだ
らいけないんだ。明日、言わないと付き合えないって……そこ
には、一人膝を抱えたのぞみの姿があった。

藤堂も一人自分の部屋でじつとしていた。そして、思わずキスをしてしまつたことを思い出した。何故あんなことを……そう思つていても、携帯がなつた。音羽からだつた。しばらく放置していたのだが鳴り止まない……仕方なくすることにした。

「もしもし……」

「あ……光?聞いてよ……」

音羽の甲高い声が藤堂の頭に響いてきた。

「『めん・・・切る・・・』

そつとおひとした瞬間、音羽の話に切ることが出来なくなつた。

「あの娘のことなんだけど・・・聞こへる?..」

あの娘その言葉・・・・岡田の『じだ・・・・』と思ひついで思わずぐつと手に力が入つていた。

「ああ・・・」

「あの娘も学校辞めるの時間の問題よ。」

「えつ?」

「だつて~毎休み終つたら帰つたんだつて

「そうか・・・じゃあ・・・」

「もう一つあるんだけど・・・・・」

「まだあるのか?」

「実は・・・・」

「えつ?」

その言葉に藤堂は我が耳を疑つた・・・・

「実は・・・お姉ちゃんの婚約が決まつたの・・・・

「あ・・・そう・・・」

「ちょっと聞いてる?」

思わず携帯を下ろし、音にならないため息をついた。しづ姉しづねえが婚約
？・・・しづ姉・・・・藤堂の幼馴染でしかも片思いの相手だった。
しかし、彼女は妹のエリ想いでもあり、彼女自身にとって、藤堂は
弟みたいな存在だった。それをわかっていた藤堂・・・そして、藤
堂が中学くらいになつた時、彼女は従兄の隆と付き合い始めていた。
だから、藤堂は気持ちを伝えることすら出来なかつた。現実を突き
つけられた藤堂・・・婚約・・・か・・・その時、再びのぞみの顔
が浮かんだ・・・

心の整理

鳴り止まぬ目覚まし、けだるい体・・・思つよつに動ひつとしない体、そんな状態でようやく起き上がったのぞみ・・・洗面台を前にして、真っ赤に腫れた目を見て、学校に行きたくない・・・しかし・・行かねば・・・」うして何とか学校までたどり着き、島田の下駄箱に、メモをこそつと置き、その時を待つた。

一方、音羽はのぞみが学校に来ていることを知り激怒していた。今日こそ、わからせてやるから・・・

そして、昼休みがきた。のぞみは島田が来るのを待っていた。昨日と同じ場所で・・・その頃、藤堂もいつも礼拝堂の裏のベンチで一人考え事をしていた。しづ姉が婚約・・・か・・・少し天を仰いだ、そんな時に思い浮かぶのがのぞみの顔だった。今朝も車の中で横を通り過ぎるのぞみの顔を見た。今日も暗い顔をしていた。そういえば、彼女と会つてから彼女の笑顔を見たことがないな・・・そんな時だった。のぞみの声が聞こえてきたのは・・・

「島田君・・・来ててくれてありがとう」

その声を聞いて、こそっと除いた藤堂・・・あいつ・・・また、島田と会つて・・・と声のする方を覗いた。のぞみは、深々と頭を下げ、しばらくして、顔を上げると島田は右手で頭をかき少しうつむいて

「俺じゃ・・・ごめん・・・」

島田の意外な言葉に驚くのぞみ・・・

「えつ?」

「許してくれ……昨日は、藤堂が急に現れて驚いたんだ。けど……
・・俺は・・・」

「島田君やめて……」

島田の話を止めて叫んだのぞみ・・・

「私このじめんなさい・・・こんなことに巻き込んで・・・」

その時だった。のぞみはふわっと抱きしめられた・・・驚き・・・思わず田を見張った・・・島田君に抱きしめられている・・・頭に血が上っていくのがわかった。

「昨日は、『めん・・・俺が・・俺が悪かった・・・』

島田の声が耳元でそつと入ってきた。その言葉に思わず田をつぶるのぞみ・・・・

その光景を見ていた藤堂 壁を持つ手に力が入っていた。あのやれり・・・・そう思った瞬間、のぞみが島田の手を解いた。

島田に抱きしめられたのぞみ、田を閉じた瞬間、藤堂の顔が浮かんだ そうぢちゃんとしないと わして、両手で島田の 胸をそつと押し、彼の腕の中から抜けた

「『めんね・・・島田君・・・・気持ちはありがたいんだけど・・・

「

「なぜだ・・・藤堂のせこか?」

「

「うん・・・巻を込めたくなこの島田君を」

「岡田……俺がお前を守つてやる・・・だから・・・」

その言葉を聞いてのぞみせつむこと、島田から皿を取つた・・・

「・・・わの氣持ち・・・嬉しこなび・・・」

「ナビ・・・」

「いわんなれ・・・」

「俺じやダメなのか?」

「いわんなれ・・・」

「なぜ・・・」

「・・・・・」

のぞみは両手をべつと握つて諦めた。キッと皿を見開いていた。

「私・・・婚約者がいるの・・・・・」

「えつ~」

「だからわき合えないの、本当にいわんなれこ

そつ言つて、のぞみは頭を下げた・・・その言葉を聞いて驚く島田・・・

「うそだろ？」

のぞみは黙つて首を横に振つた。島田は、のぞみの顔を見て、溜息をつき、肩を落として去つて行つた。そして、ぞみに婚約者がいると聞いて驚いた藤堂は、天を仰いだ。

溜息をついたのぞみ・・・

一人、たたずみ肩を落とした。

これで良いんだ これ以上、島田君に迷惑掛けれないもん・・・
・これで・・・これで・・・いいんだ・・・そつ思つてているのぞみの
心は晴れやかだつた。

そして、大きく息を吸つて、よしと気合を入れた時だつた。

「岡田！・！」

後ろからどこかで聞いた声がした。ま・・まさか・・・

「岡田！・！」

その声は、確実に近くなつてきている・・・のぞみは、そつと後ろ
を振り向いて、声の主を確認した

やはり・・・思わず目をつぶり、前を向いた・・・なんで? 藤堂
さんがここにいるのよ・・・

こいつ俺見たのに無視か? 藤堂は、目の前でうつむいているのぞ
みの背中を見つめ近づいた。そして、さつきのことを思い出した・・
・「私・・・婚約者がいるの・・」その言葉を聞いて思わず天を仰
いだ・・・その時だつた・・・婚約者って事は、こいつは本気にな

「……ではない。……せむ。俺の彼女をやるのはこりつだ。……」
そう確信した。

肩をポンと叩かれ、ビクッとした背筋を伸ばしたのがみは怪訝そうな顔をして藤堂を見た。

「と・・・藤堂さん・・・

「岡田・・・そんな顔をするなよ・・・」

「え?」

「昨日の件だけど・・・

「それは断ったでしょ!」

「もう一度、考え方直してくれないか?」

「え?」

その時だった学校のチャイムが鳴り響いた。藤堂は、ポンとのぞみの肩を叩いて

「じゃ・・・放課後、ここで」

そう言い残して、藤堂は走り去つて行つた。

ええ～～！～～どうことよ～～！そう心で叫んでいたのぞみ、チャイムが鳴ったのも忘れしづらくその場に立ち去っていた。

そして、もう一人この話を聞いていたものがいた。それは、音羽だつた・・・昨日の件つて一体何よ・・・断つたつて・・・どうこうと？・・・あの娘・・・許さないから・・・

慌てて教室に戻ったのぞみだが、10分以上授業に遅れ、先生にこいつひどく叱られた。貴様！それでも受験生か？とか、やる気があるのか？さんざん吼えまくる先生を前に、なんでこうなるのよ～！～！そう思いつつも、ただ・・・はい、すみません・・・と謝り続けること5分、先生の説教から開放され、ようやく席に着くことが出来たのぞみだったが、それどころではなかった

なんなのよ・・・昨日、断つたのに・・・どうこうこと、藤堂の言葉が頭の中を駆け巡り授業が身に入らなかつた。

そして、放課後になつても、藤堂の言葉が耳から離れないのぞみが、どうしようつと悩みながらさつきの場所に向かつてとぼとぼと歩いていふと音羽たちが取り囲んだ。

「ちよつとあなた、いい？」

中庭に連れて行かれるのぞみ・・・・藤堂はその光景を教室から見つけた、エリの奴何をしてるんだ？あいつを囲んで・・・そう思いつつも、しばらく、傍観することにした

のぞみは壁の方に追いやられ、数人に囲まれた。田の前には音羽がいた。

「返事次第じや、ただじやおかないわよ・・・」

「一体何のことよ？」

睨みつけてくる音羽を首をかしげながら見たのぞみ あなたは
一体何が言いたいの？本当に意味がわからなかつた。呆然と見てく
るのぞみに苛立つ音羽は、両腕を組んで、さらに怖い顔で睨んだ。

「藤堂さんを横取りする気？」

両田を大きく開いて驚くのぞみは口を大きく開けた。

「はあ～？」

音羽の口から飛び出だしたのぞみが、横取りしてしまったのぞみ。今……横取り……て……どうしてそんなに話が飛び出す……としばらく考へると……ひょつとして、藤堂さんの話を……それって、完全にまことにば……とにかく逃げないと……心う思つてこると音羽がやうに近づいてきてのぞみの顔を指差した。

「じめかねやっ!」

怒りをあらわにした音羽に対しのぞみは両手で押えてと訴えた。

「ちゅ・・・・・ちゅうと・・・・じゅこひ」とですか?」

「やけに親しこむわね……」

「え」

音羽の言葉に驚くのぞみ

「本物だとほかぬ?」

「いい加減にしてよ!…私が何をしたってのひの?」

「だから、昨日の件つて何よ」

「えつ?」

「本当にあなたって人は、顔を見るだけでムカつくわ、ビリビリ汗を使ったのよ！！」

そう言って音羽はのぞみの胸倉を掴んできた。その手をふりほどいたのぞみ

「いい加減にしてよ！…私、何もしてないわよ…じゃあ…」「待ちなさいよ…」

そう叫ぶ音羽を無視してのぞみがその場から立ち去りつとした時、のぞみは目の前に藤堂が立っているのを見つけ、また、頭が痛いのが来た。つむき左手で頭を抑えた

「藤堂さん…」

声を出す音羽を無視して、藤堂はのぞみの声をかけた。

「おー…」

その言葉に頭を軽く振ったのぞみは、ふうーと息をして、藤堂を指差し怒鳴った。

「ひどなことしたのあなたなの？」

「俺じゃないよ。」「いつだよ」

藤堂は、音羽を指差した。それにたじろいだ彼女は数歩下がったが、その場から離れようとしなかった・・・

「わ・・・わたしは

その様子を見た藤堂・・・

「悪いがはずしてくれないか・・・」

「えつ?」

「Hリ・・悪いが・・・はずしてくれないか?」

「どうして?」

藤堂はのぞみを指差した。

「ここつと話があるんだ!・・・」

「でも・・・」

そつこつ音羽を藤堂はにらみつけた。

「俺の言つこと聞けないのか!・・・」

「わ・・・わたし・・・」

「Hリ!・・・」

藤堂の言葉に慌てて逃げる音羽・・・

それを見てた藤堂は、のぞみをじっと見ていたら、後ろの方で音羽の姿がチラチラと見えた。チッと軽く舌打ちをして、のぞみの方に歩いていった。そして、通りすがりに耳元と囁いた

「1時間後、ここに来い」

「えつ？」

「じゃあ・・・」

驚いているのぞみの肩をポンと叩いて、藤堂は去つて行った。

「・・・1時間後って?」どうしようと?振り返ると藤堂は右手を振つて去つて行った。

一方、音羽は、慌てて藤堂を追いかけた。

「『めんなさい』」

藤堂はチラリと音羽の方を見た。

「俺・・・疲れたから帰るわ・・・」

「えつ?」

「じゃあ・・・」

「光・・・『めんなさい』・・・」

音羽はさすがに藤堂の服のすそを掴んだ。それを見た藤堂は、

「わるいが……俺……疲れてんだ……」

「あつ……」

音羽が思わずその手をはずしたのを見た藤堂は、しばりと戻る

「Hリ・・・

「えつ・・・」

藤堂の言葉に、Hリの顔に少し笑みが戻った

「じゃ・・・待っているから・・・」

そうついつい走り去ったHリを見て、藤堂は、車に乗った。

「一時間したら戻るぞ・・・」

「一時間後、」*（）* 来い

のぞみは藤堂の言葉を思いでいた。
「 来いつて・・・どうこうの意味・・・」*（）* の間の話つて?ま・・まさか・・・彼女にな
つて本気で言つてゐわけじや・・・それとも行つたらいじめられる
んじや・・・びひしきよつ・・・そう迷つていたが、結局、藤堂の言
われた場所にいた。そして、時折携帯を開き、時間を見てはため息
を付いた。そんな困惑にのぞみが苦しんでいる時をよそに、藤堂は、
音羽とあるといひこいた。

「光・・・今週の田曜日・・・」

「*（）*の間も言つたひつ・・・用事があるつて・・・」

「せう・・・」

そう言いながら・・・藤堂に本心を聞けないジレンマを抱えていた
音羽の姿がそこにはつた。

「じゅあ・・・帰るから・・・」

「ひそ・・・」

藤堂がそんなことをしていると知らずのぞみは、いわれた場所で藤
堂を待っていた。そして、藤堂が田の前に現れたのはのぞみが何度
目かの溜息をついた時のことだった。のぞみを見つけた藤堂は、の
ぞみに近づいた　ち・・・近づいてくる・・・そう思つのぞみ

を尻目にしづらく見つめ再び近づきだした。のぞみが気付いた時は既に藤堂の顔が間近にあった。
ち・・・近いってば・・そ
う感じた時、藤堂が話しかけた。

「ところで、この間の話なんだけど、どう？」

藤堂の言葉にため息を付いたのぞみ、そして、藤堂を睨んで
「断つたでしょ。」

ぐいっと近づいてきた藤堂に思わず左手で自分の顔を隠したのぞみ。
・・それを見た藤堂の顔が一瞬ふつと顔が微笑んだようにのぞみに
見えた。しかし、藤堂の一言に再びのぞみは硬直した。

「もう一度、考えてみないか？」

何言つてゐるのよ

そう思つたのぞみ

「こやよ。」

そう言つて、畠をくらした。

しばらく・・・一人の間に沈黙の時間が流れた。

その沈黙を破ったのは、一人の後ろから聞こえてきた声だった。

「かわいそうねえ～光」
ひかる

その声に驚いたのぞみと藤堂が振り返るとそこには素敵な女性が立っていた。誰？この人？のぞみがそう思つてはいると藤堂が

「なんで・・・しづ姉^{ねえ}が・・・こんなところに？」

「ちよっと、用事があつてね・・・」

そう言つて藤堂に軽くウインクをした。藤堂さんとこんなに親しく・
・・それもそのはず、その女性はウインクしただけでなく気軽に藤
堂の肩をポンと叩いたのだった。それを見て驚くのぞみ・・・その
時だった。藤堂がしづ姉に声をかけたのは・・・

「しづ姉・・・そういうえば婚約したんだって・・・」

その言葉を来たしづ姉は少しがっかりした表情を浮かべていた。

「なんだ・・・もう知つていたの？」

「ああ・・・」

「どうせエリックじょう・・・あのおしゃべりが・・・」

「ああ・・・」

会話がはずむ二人についていけずただ戸惑うのぞみ しづ姉つ
て誰？・・・・藤堂さんとやけに親しそうだけだと戸惑つていたの
ぞみだが・・・ん？一度いい、今のうちに逃げようと藤堂に声をかけ
た。

「藤堂さん・・・」それで

「あ・・・ああ・・・」

以外にも藤堂から精氣のない返事が返ってきた。これはチャンスとその場を離れようとした時だった。

「ちょっとー」

しづ姉がのぞみに声をかけられ、びくっと立ち止まり振り返るのぞみ

「はい?」

ツカツカツカとしづ姉はのぞみに近づきのぞみをじろじろと見回した。

「ふ～ん・・・かわいいわねえ・・光は・・・妹じやなく・・この娘のこと好きなの?」

しづ姉の言葉に驚くのぞみ・・・うそー!・・・藤堂さんか?・・・わ・・私のこと好きひでひつこいつとへそつ思つて藤堂を見ると反應がない・・・

「ああ・・・」

藤堂は戸惑っていた・・・今、違うといえば・・・のぞみが・・・と思つとああ・・・と言つあいまいな返事になつたしまつた。

その「ああ・・・」言つ言葉 のぞみとつては、一瞬何が起つたかわからなかつた。つそ――――――と驚きのあまり・・・声に出なかつた。い・・・今・・・ああ・・・って言つたわよね・・・そ・・・それつて・・・ひょつとして・・・その衝撃で思わず

のぞみは硬直した。

「ふ～ん。妹のエリとまったくタイプ違ひ……」「うううのが好きなんだ。」

妹のエリ？その言葉にエリ……って誰？ひょっとして、音羽さんのこと？一抹の不安がのぞみの脳裏をよぎった。

一方、藤堂にとつても、しづ姉の登場は、予想外のことだった。しづ姉……なんでこんな時に現れるんだ？それにそんなこと言ってここで否定したら……元も子もない……そう思つていると数少ない言葉で切り返すのが精一杯だつた。

「別に……いいだろ。」

藤堂の表情を見てにやりと笑うしづ姉は振り返りのぞみの方を見て話しかけた。

「あたし、音羽しづか。あなたは？」

「わたし……岡田のぞみです。」

「のぞみちゃんか……ふ～ん」

じろじろとのぞみを見るしづ姉……

「あ……あの……音羽さんって？」

「想像通り、エリは私の妹よ……」

ええ？ ハリ・・つい音羽ハリ？ のこと・・・ひやでしょ？ ・・・
てことは・・やばいよ・・・だつて
しづ姉つてハリのお姉さんつて・・・わたくしの藤堂さんの言葉・・・
ええつ！？ ・・・どうこつていいかわからず思わずのぞみは頭を下
げた・・・

「それでは、これで？」

のぞみは、その場を逃げた。

木曜日か……今週は、長い……そつ思つたのぞみ、しかし今日は9時になつてもベットの上にいた……そう……学校を休んでいた。月曜の夜に突如降つて沸いた縁談を前のぞみの母が急に服を買いに行くと言つ出したのだった。それも昨日のぞみが家に帰つてすぐのことだつた。

「今から行く気力はないわよ……」

その言葉に、にじりと微笑んだ母は、

「じゃあ……明日行くわよ……」

「えつ? 学校は?」

「休んじゃなきこと……」

「お母さん……学校とお見合ひどしが大事なのよ……」

のぞみの言葉に母はにんまりと笑つた。その顔を見て嫌な予感がした。

「当然……お見合ひよ……」

母の一言で学校を休むことになつたのぞみは、まだベットの上でのんびりとしていた。嵐のような一週間だ……のぞみはそつ思つた。お見合ひの話が月曜の夜。藤堂と色々あつたのが火曜日……そして、昨日……藤堂の「ああ……」と言つた葉を思い出しつつある。

つ……思わず大声で叫んだ。

「のぞみ……何叫んでるのよ……」

そう言って、のぞみの部屋に入ってきた母は、のぞみがまだベットにいるのを見て呆れた。そして、のぞみの布団を取り上げ

「早く起きなさい……！」

こうして、のぞみは母とショッピングセンターへ行った。しかし、のぞみの姿は、1階にあるカフェにあった。なんであって……のぞみの服は早々に決まったのだが……母は買い物にしばらく引きずりまわした挙句、そのカフェで待つてなさい。だって……疲れきったのぞみは、一人カフェでのんびりしていた　ま・・いつか・・一人ラテを口にしたそんな時だった。のぞみの携帯が鳴ったのは、……着信を見ると大山からだつた。

「もしもし……」

「のぞみ……婚約者がいるって本当?』

のぞみは飲みかけのラテを思わず飲み込み、咳き込んでしまった。

「もしもし……のぞみ……聞いてるの?』

席が落ち着いたのぞみのは。さつきの言葉を思い出した。
婚約者つて?

「えりこり」とへ。

「あなたが言つたんでしょ、ひへ。」

「誰から聞いたの？」

「ひへ」とせ? 本当なの?..

「えりへ?」

「えりこのひへ」とよ。

「えりへ?..」

思わず大声を上げたのぞみ・・・周囲が奇異な視線を感じ思わずつむこた・・・

「ど・・・えりこりへ?..」

「だから・・・のぞみがに婚約者がいるって言ひて、島田君を振つたつて・・・」

確かにそう言つたわよ・・・でも・・・島田君つてそんなに口が軽いの? そう思つてみると

「でも・・・のぞみつて幸せ者よ・・・」

大山その言葉が全く意味がわからないのぞみ・・・何が幸せ物なのは・・・学校中の噂つて事は・・・どう考へても、笑いものになつてるんでしょ

「島田君……本気だつて……」

「はあ～？」

「何、間抜けな声を揚げてるのよ……」

「な・・なにが本気なのよ……」

「だから……のぞみの」と本気だつて……」

「うわ……」

「嘘じやないでば……あんたの嘘もばれてるし……

「どうこいつ意味？」

「婚約者のことよ……」

「えつ？」

「のぞみに婚約者がいなって、ばればれなんだから……」

「どうこいつ」と……

「あなたの弟から聞いたんだつて……だから……のぞみ……あなたが藤堂さんとの件で、島田君に影響ないよう身を引いたんだつて……超感動したつて」

「えつ？」

「島田君がー！超感動したんだって・・・」

「もしもし？聞いてるの・・のぞみ・・・」

うそ・・・どうしたこと？携帯を耳から話したのぞみ・・・島田君・
・ひょっとして・・・わたしの言つたこと理解していないの？の
ぞみは、明日学校へ行くのが怖くなつた・・・

一方、藤堂のところには音羽が現れていた。

「あの娘・・・今日休みらしいわね・・・」

音羽の口から出たあの娘に反応して振り向いた藤堂は、しばらく、
音羽を見つめた。 『この様子だと・・・しづ姉・・・昨日のこ
と言つてないな そう思つていると見つめられていた音羽は嬉し
そううそつと肩をつづいた。

「どうしたの・・・そんなに見つめて・・・」

「別に・・・」

そう言つて藤堂は田を落とした。

「それと、あの娘・・・島田君と付き合つているようね・・・」

島田とのぞみの噂は藤堂の耳にも届いていた。しかも、婚約者はい
ないと言つても・・・結局、無理だったか・・・藤堂は、少し俯
いた。

「うういな・・」

「しかも・・・あんな嘘つくなんて許せない・・わざと島田君の気を引くためよ・・・絶対そうよ・・やう思わない・・」

「ああ・・・」

「だから・・・光・・・あの娘のことせ、私に任せてしまつてね。」

「ああ・・・え?」

「じゃあ・・・任せといてね・・・」

藤堂が気付いたときには遅かった。音羽は、教室を後にじようじていた。何を任せりつて言つてた?あいつ・

花の金曜日？

買い物を終え、ようやく母から解放されたのぞみは、家に着くやすぐに弟の部屋に怒鳴り込んだ。

「竜馬……！」

けたたましく響いたドアと壁の衝撃音、それと同時に入ってきたのぞみの怒鳴り声に、驚き振り向いた竜馬の首をのぞみは押さえ込んだ。

「うう……」

「竜馬……あんたって人は……！」

「な……なんだよ……おねえちゃん……！……うう……」

竜馬は、慌ててギップアップのサインを出した。しばらくして、その手を離したのぞみ

「あんた……島田君に何言つたのよ？」

「姉貴、嫌がつてたわう……おのおかしづらい……」

「えつ？」

竜馬の言葉を聞いて、じぱらく固まつたのぞみ

「姉貴の為に、言つたんだよ……」

「セリ・・・」

のぞみは、龍馬を持っていた手を緩めた。そして、うつむき・・・・・しばらくして、溜息をついた。 そうか・・・・龍馬は・・・私の為に・・・・そう思うとやがてその手を放し、

「「あん・・・・」

そういう残し、ふらふらと龍馬の部屋を出て行った。 どうしよう・・・明日・・・部屋に戻ったのぞみの頭はそれで一杯だった。 そして、バタンとベットに倒れこんだ。しばらく考え込んだのぞみ・・ふと・・藤堂の顔が浮かび、それとともに「俺の彼女をしないか」そして、「ああ」と言つ言葉がのぞみの顔を熱くさせた。ちがう・・とりあえず島田君に付き合えないって言わないと・・けど「どうやって」・・・・のぞみは、再び眠れない夜をすりした。

さわやかな朝の日差しが憂鬱なのぞみの起きを襲つた。そんな憂鬱な状態と寝不足との戦いの中、のぞみは学校に向かっていた。そして、校門に着いた時、後ろから声をかけられた。

「岡田さん?」

その声に思わず振り返るのぞみ・・・・そこには、音羽がいた。

音羽さんが何故?私を呼び止めるの?そう思つた瞬間だった。今度は、後ろから別にのぞみを呼ぶ男の声がした。

「岡田!――」

えつ？何？一体？と思つて振り返つた瞬間、のぞみは男性に抱きしめられた。

「岡田！……俺が守つてやる……！」

島田君なの？

男性の腕の中で訳がわからないのぞみ・・・一人の様子にあっけに取られた音羽・・・周りは、島田の行動に沸き立つていた。その様子が見えないのぞみ 一体何が起きているの？必死にもがいでいるのぞみ・・・しかし、その動きが島田にとって、うなづいているように見え力を緩めた。・・・この時二人の横を藤堂の車が通過した。藤堂の目には抱き合つた二人の姿が見えていた。そして、そのうちの一人がのぞみであることがわかつた・・・結局、昨日、音羽が言つた通りだつたが・・・しばらくして藤堂はため息をついた。

ようやく腕の中から開放されたのぞみ・・目の前には島田が・・・数十人に囲まれていた。やがて、その人たちから「おめでとう」と言つた声が上がってきた。その光景を見て うそでしょ・・・思わず顔が真っ赤になつて教室へ走つて逃げていつた。

教室へ着くと、大山と岩崎が駆け寄つてきた。

「のぞみー！…やつたね！…」

のぞみは、ある種熱烈で少し嫉妬が入つたような歓迎を受けた。

もう限界だ・・・のぞみがそう思つたのは4限目の授業の最中だつた。これが終つたら帰ろう そして、終了のチャイムが

鳴るのを待つた。

のぞみが待ちに待った授業を終了するチャイムが鳴った。その瞬間に立ちあがり鞄を持ったのぞみはすぐに教室の後ろの出口に向かった。

「のぞみ・・・どこ行くの？」

そう言つて石崎に向かって

「家に帰る。」

「ちょっと待つてよ

大山がのぞみの手を引いた。振り返ったのぞみは

「昼から用事があるの・・・」

そう言つて大山の手を振り切り、教室を脱出することに成功した。しかし、のぞみにとつてもう一つ厄介なことが残っていた。それは、島田が昼休みに例の場所に来いと言つていたことだった。その場所へ来たのぞみ　断らないと・・・その気持ちで一杯だった。どの位時間がたつたのだろう・・・そこへ島田が現れたのは、昼休みが残り10分くらいのときだった。・・・彼はのぞみをじっと見つめ、そして、

「岡田・・・今度の休みデートでもしないか？」

すっかり、自分の彼女になつたと思い込んでいた島田……のぞみは、はつきりと言った。

「「」みんなさこ・・・・

「土口どうじけもダメか?」

「「」みんなさこ・・・家の用事があるから・・・」

「わづか・・・・?」

島田は右手で自分の後頭部を少し搔いていた。

「ヒリード島田君・・・」

そんな島田を見ていたのぞみ 今しかない・・今しか・・・
そう思い、思い切って言おうとした瞬間だった。チャイムが鳴り響いた・・・

「あつと・・時間だ・・行かないと・・・じやあ・・今度落ち着いたら・・・」

島田は慌てて教室に戻つて行った。その姿を見送つて、ため息をついたのぞみ しかたない・・来週に言おう・・そう思つて校門の方へ向いたら目を見張つた。そう、のぞみの田の前に藤堂が立つていたからだった。

藤堂は、のぞみがこの場所に来た時からの一部始終を見ていた。

こいつ結局、島田とか・・チャイム鳴つたし 教室に

戻ろうとするとのぞみが振り向いたので藤堂は思わず立ち止まつた。藤堂の前には驚いた表情ののぞみがいた。 な・・・なんで

「……」藤堂をじっと見つめながら、藤堂は微笑みの表情を見て思わず微笑んだ。

「お前……あこつと付き合ひてこるのか？」

「ハハタツト……」

首を横に振ったのぞみ　付き合ひてこるのか……その言葉が何故かのぞみの心を曇らさせた。

「ビハツヒ」とだ？

「『』めんなさい……わたし……彼とは……つきあえない……」

「付き合えな」「……」

「島田君に、これ以上、迷惑掛けたくないの……」

「わづか……そんにあこつのことが好きなんだな……」

藤堂の言葉を聞いたのぞみ、気付くと田から涙がこぼれた……あれ？ 噂通りの行動をとるのぞみを見た藤堂は呆れたがその目からこぼれた涙を見て驚いた。

「『』めんなさい……」

いつむき少し涙を堪えながら話すのぞみの口から自然とこの言葉が出てきた。なんども何度も・・・
そんなのぞみを見て、藤堂は思わず抱きしめてしまった。しばりへ

彼の胸の中で泣いていたのぞみ・・・やがて、藤堂の胸をそつと押し、鼻をすすりながら離れ・・・のぞみは顔を見上げた・・・

「大丈夫か？」

藤堂が声をかけると無言で頷いた。しかし、のぞみはその場所を離れることが出来なかつた。そんな時だつた。のぞみの携帯が鳴つた。・・そして、やつとわれに帰つたのぞみ。

「藤堂さん・・・本当にすみませんでした・・・」

慌ててその場から走り去つて行つた。

帰りの電車の中、のぞみは気付いた・・・藤堂のことが好きなんだと・・・でも、決して口に出してはいけないんだと・・・

のぞみの後姿を見送つた藤堂・・・腕の中にはのぞみの感触が残つていた。じつと手を見つめ、溜息をついた。あいつは、島田のことが好きなんだと・・・そう思つと見つめていた手に力が入つていた。まさか・・・おれが？そして、もう一度、あいつは、島田のことが好きなんだと自分に言い聞かせた。

田曜日、のぞみの姿はホテルの前にあつた・・・財閥の御曹司だし、受けようか？あのおかっぱテープの藤堂光・・・生理的に無理・・・逃げたい・・・けど・・・これしかない・・・島田君のことけじめをつけるには・・・そして、・・・藤堂さんを・・・あらめるには・・・両親に連れられ指定された部屋に入った。しかし、母の勘違いで一時間も早く着いていた。しばらくして席を立つたのぞみ

「どうへ行くんだ？」

「ちよつと・・・」

「ちよつと？」

「トイレ・・・」

「すぐに戻つて来いよ。もうすぐ来るから。」

「わかつたわ・・・」

トイレの洗面で鏡に映る自分の姿を見ていたのぞみ、 じこまできたら・・・もうやるしかない のぞみは大きく息を吸い自分に気合を入れた。そして、トイレから出るとそこに藤堂の姿を見つけた。と・・・藤堂さん？思わず見とれたのぞみ・・・

「岡田・・・」

「あ・・・」

藤堂が近づいてくるのぞみは気が付いて逃げようとしたが手をつかまれた。

「何故？」

「藤堂わざわざ・・・」

慌てて目をそらしたのぞみは俯いた。しばらくして、一人の姿はは近くのソファーにあった。俯いて座っているのぞみの皿の前でため息を付いた藤堂

「うそなどいひで畠田と会つてしまへ

「ええ・・・」

チラッと藤堂を見たのぞみは再び俯いてしまった。 な・・な
んで藤堂さんがここに？ 皿の前に座っている藤堂をチラチラ見てい
た。そんな時だった。

「どうしてここにいるんだ？」

「えつ？」

のぞみはしばらく考え込んだ。そして、事実を語おうと決意した。

「実は、今日、お見合いなの・・・」

「お見合について・・・じゃあ・・・婚約者の話つて、本当だったの

か。」

黙つて頷くのぞみ・・・藤堂はその悲しそうな顔をじっと見つめていた。俺と同じ奴がここにもいたのか・・・しかも、こんな近くに・・・視線を上げると藤堂がじつと見てるのに気が付いたのぞみ

「ど・・・どうしたの? そんなに見つめと・・・」

そんな時だった。藤堂はぼそっと呟いた。

「実は・・・俺もなんだ・・・」

「うん・・・」

「嘘じやないんだ・・・」

のぞみは、今までのことを思い出した。それって・・今までのことって・・・ひょっとして、私と同じことを考えていたってこと?

「えつへじやあ・・・付き合つてくれつて言つたのは?..」

藤堂は、溜息をついて・・・

「『』あん・・・」

やつぱり・・・やつだつたんだ・・・けど・・・

「そんなに嫌いなの?」

「えつ？」

「その……見合いで相手……」

「ああ……」

「ああ……で、藤堂さんって言つて財閥の御曹司だからそれなりの人なんでしょう。私と違つてやう思つたのぞみは、思わず口に出してしまつた。

「どうして？」

その言葉を聞いた藤堂、再びため息を付いて、頭を2、3回振つて言つた。

「あれのどじが俺の見合いで相手として相応しいんだ？」

「あれがつて？」

「28才で聞いたけど、『眞を見ると太田のおばあちゃんだぜ』……」

藤堂は、言い終わると又ため息を付いて、俯き両手で頭を抱えた。

えつ？ それつて……そつ思つと自分もそつだつたと思つて出したのぞみは、お見合いで相手の愚痴を言い始めた。

「私も聞いてよ……ひどいのよ……お見合いで相手は28才ひつただけど。テープでおかっぱり、どつ見ても40台以上よ。どつ思つ？」

のぞみの言葉を聞いた藤堂 今、なんていつたんだ？・岡田もひょっとして氣の進まないお見合いをするのか？フト顔をあげのぞみを見ると両手で頬杖をして、ふうーっと軽く息を吐いていた。

「え？・岡田・・今なんて言つた？」

「だから、ねかつぱーナフのおひさんなの・・・」

「わうじやなく！」

「じゃあ・・なんなのよー！」

のぞみは、思わず口を反らせた・・・やつぱつ言つてじやなかつた・・・なんでそんなに聞くのよー

そう思つてこる時、おれに図星と叫べる言葉が藤堂の口から胸に刺さつた。

「嫌なんだろ？・・・・・・」

「まあ・・・わうだナビ・・・」

徐々に声が小さくなるのぞみは、再び俯いてしまつた。その時だつた。藤堂が急にのぞみの横に座つてきた。なぜ？・そこに座るのよ・・・驚くのぞみを尻田にのぞみの手をとつて握り締めた。

な・・・何がしたいの？・藤堂さん？驚くのぞみの名前を呼んだ・・

「岡田・・」

「な・・なによ・・」

「だったら・・俺が彼氏として、一緒に引っ越しやるよ。」

「えつ?」

「だから・・俺達・・・付き合つてることにして・・・」

のぞみはよつと藤堂の言つてこる意味がわかつた。

「あ・・・」

「あとでお前が一緒に来てくれるか?」

「うふ。わかったわ。」

気がついたらのぞみもその手を握り返していた。

「あ・・・」

思わず手を離す一人

「まあ、岡田の方から行くか・・・」

「えふ・・・」

こうして、藤堂は、父親に30分ほど遅れると云ふえた後、一緒にのぞみが見合ひをする部屋に向かった。

ドアの前に立つのぞみ　これで変わるかも・・・絶対うまくいく・・・そう信じ、心臓が高鳴るのぞみは藤堂と並んで立っていた。そして、藤堂の方を見て思わず彼の左手をぎゅっと握っていた。その手を気付いた藤堂は、のぞみのほうを向いた。

「ここは部屋か？」

「わう。」

二人はお互に頷き、そして、中に入つて行つた。中央にあるテーブルを境に右側にのぞみの両親が座つていた。しかし、まだ、相手方が誰も来ていなかつた。　どういうこと?と思いつつ、藤堂を見る

「どうこうことだ?」

のぞみの耳元で呟いた。

「まだ来ていないみたい・・・」

ドアの音を聞いて、母親が話しながらのぞみの方を見た。

「のぞみ戻ってきたの、早く座つて・・・」

するとのぞみ横に立つてゐる藤堂の姿に気付いた

「こ」の人は?」

のぞみと藤堂が顔をあわせ頷いた。そして、話そうとした時だつた。
一人の後ろから、ぶつぶつ言いながら一人の男が入ってきた。

「光の奴・・・30分も遅れるって・・・どうこりうじだ?・

その声を聞いて驚き振り返る藤堂 藤堂さんどうしたの? そう
焦るのぞみも藤堂の視線の先に眼をやつた。そして、藤堂の口から
とんでもない言葉が入ってきた。

「お・・親父・・・なんで?・?・?

お・・親父つて? どうこりうじと? のぞみが考える暇もなく、
その人の口からのぞみの耳を疑つ言葉が発せられた。

「セリやあ・・・・お前のお見合いで語つか婚約者に会わせるためだ
よ・・・・

「えつ?」

思わずのぞみと藤堂は顔を見合させた。 「うそー――――ど

ういうこと? 藤堂光つて田の前の藤堂さんなの? つて藤堂さん田身
も驚いた顔をしているし・・・・どうなつているの?

藤堂も親父の言葉を信じられないでいた 「うそだらう・・・・田
田のぞみつて・・・」・・・じこつなのか?

ほんの少し前まで、自分達の未来を信じ、強く握られていた手は、藤堂の父の一言で、一瞬で離れ、驚きの表情でお互いを見つめ合う二人・・・・・どういうこと?のぞみは現状が理解できずにいた。そんな時、一人は藤堂の父に肩を押された。

「立ち話も何だから、まあ座りたまえ。」

こうしてのぞみと藤堂のお見合いが始まった。

向かい合いつ様に座られた一人、その横にはにこやかな顔をして座る親達の姿があった。――どうなってんのよ――一体!――そう叫びたいのぞみは、ふと顔をあげると目の前の藤堂の顔を見て驚いた。――あの顔、怒ってるわ・・・私、知らないって・・・小刻みに顔を横に振るのぞみ、その様子を見た藤堂は、ただ溜息をし俯いた。――藤堂さん・・・溜息して・・・う・・・ついさっき迄までのあれは、何だったの?ひょっとして?のぞみは、両親の方を向いたら、慌てて目をそらした。横にいる母を肘でつついた。

「な・・・何よ

「知っていたの?」

「知らないわよ。私も今聞いて驚いてるのよ。けど、良かつたじやない。」

「何が?」

「あのオカツパテブじやなくて、イケメンで」

のぞみの母は、そう言つと逆にのぞみを肘でつきかえした。——お母さん他人事でしょ？……そう言つ問題じやないってば～そんなのぞみをよそに、藤堂の父は、右手をあげるとひつひつた。

「わらわら、良いかな？はじめても」

わや～始まつちやう・・・のぞみが頭を抱えた時だつた。

「親父、[写]真と違つんだが」

と・・・藤堂さん、そうだ私も違つんだ。

「私も違つたですけど」

藤堂の父は、一人を見て、にせりと笑みを浮かべた。

「ちよつとした、手違いがあつたよつだな、それとも、あの[写]真の相手と見合にするかね？」

「えつ～！～いえ！それは・・・」

慌て首を横に振る一人・・・な・何てこと言つたのよーー・・・わつ思つたのぞみだったが・・・

「では、」

藤堂の父が話を進めとしたい時だった。——そのままじや・・・そう思つたのぞみはもう一つの疑問をきいた。

「[写]眞の手違いだけならわかるけど、何故年齢まで、違つんですか？」

のぞみの言葉に暫く考えた藤堂の父、右手を顎にあて、しばりへ、のぞみを見つめた。そして、のぞみの父をチラリと見た。

「元氣の良いお嬢さんだ、いい娘を持つたな、岡田、」

その言葉に黙つて頷くのぞみの父、さらに藤堂の父は、続けた。

「（）想像の通りだ、同じ学校と聞いて、そうしたんだがなにか？」

「それは何故？」

「（）の縁談をつましくさせるためだ。ただ、それだけだ。」

のぞみは、大きく息をした。——んーなんて逃げ方、どうしよう・・・これしかない。

「カジ、こきなつ会つて結婚は、あんまりすきませんか？」

「何が？だいたい、お見合いつてのは、そんなものだらう。」

平然と話をした藤堂の父は、お茶を手にして、口にじょじょとした時、のぞみが立ち上がり

「ですから、まだ高校生だし、いきなり結婚なんて、」

その言葉を聞いた藤堂の父は、一ヤコとして

「君達の年齢なら、親達の同意があれば、結婚できるから心配無用だ。そうだな、岡田」

「はい、」

父の返事を聞いたのぞみは驚いた。しかも、さりげなく、追討ちをかけるようなことを母が言つた。

「いいじゃないのよ、折角の縁談なんだし、お金持ちでイケメンじゃない、一体何が不満なの」

ここにやか話す母、その言葉を頷いて聞いている藤堂の父・・・

「お母さんーー。」

のぞみがそう言つ藤堂の父が

「わしも悪い縁談じないとおもうが」

そんな光景を見てーーー問題はそこじゃなーってばーーー

「ですから、私が言いたいのは、そんなことじゃなくて」

「じゃあ一体何なんだね」

「私・・・藤堂さんのことよく知らないし・・・それに・・・いきなり結婚と言われても・・・」

その言葉にしばらく黙った藤堂の父・・・飲みかけていた湯飲みを

机のあいて、腕を組んでのぞみをちらつと見た。

「ふむ・・・時間・・・か・・・」

そんな時に横から母が余計なことを言った。

「何言つてゐるよ、わっせ、あなた達すぐ仲良くなつたじやない、手を握り合つちゃつて・・・」

母のこの何氣ない一言はのぞみを凍らせた——な・・・なんて事いづのよ・・・

「お母さんーーー。」

「まあまあ・・・のぞみさん、そんなに光のこと知りたいのなら、この後一人でよく話しあつたら良いじゃないか。なんなら・・・今晩このホテルで光と泊まるか」

「チラシ待つてくださいよ」

のぞみがそう叫んだと同時に、藤堂も叫んだ

「親父ーーー。」

「まあまあ」やつまつと藤堂の父は、

「時間・・・か・・・確かにその通りだ」

そつ言つて指を一本たてた手を突き出した。

「一ヶ月・・・一ヶ月をやるからお互に親交を深めるよつて・・・では、始めてもいいかね・・・のぞみたこ」

「でも・・・」

のぞみが言おうとした瞬間、バンと机を叩いてのぞみをギロコと睨んだ

「いいですよね」

「はい・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2818z/>

USOよね・・・

2011年12月31日22時50分発行